

〈書評〉飯野山治著 『たそがれ法師の物語-平家物語誕生異聞-』

谷口, 卓久

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

30

(開始ページ / Start Page)

92

(終了ページ / End Page)

93

(発行年 / Year)

1984-08-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019405>

老年客気の文学であると断じたくなるのもこの句集の功名であろうか。

(一九八三年十一月 八幡船社刊 定価一三〇〇円)

〇〇円)

鈴木和雄氏は本名も同じ、一九三一年卒。
花岡昭氏は「八幡船」同人。

飯野山治著『たそがれ法師の物語』

——平家物語誕生異聞——

谷口卓久

「たそがれ法師」というどこことなく謎めいた題名と、外装を飾る『平治物語絵巻』(信西巻)に心引かれ、飯野山治『たそがれ法師の物語——平家物語誕生異聞——』を店頭で手にしたのである。この作品は、古代末期から中世への転換期における歴史の全体像をダイナミックには、描き得てはいないものの、飯野氏が原『平家』作者に擬する主人公信阿の流転の生涯を執拗に追跡することにより、より鮮かに時代のなまなましい質感を読む者に伝えている物語である。聊なりとも軍記物

語を研究している筆者としては、『平家物語』を読まれた後に薦めたい一書である。

比叡山延暦寺東塔の無動寺谷に住む、漆にかぶれ、蒼黒くつやのない「椎の木」の肌、山椒魚の背、干乾びた墓の死骸に似た凹凸だらけの、伎楽の迦楼羅面さながらの醜惡な容貌の法師として書き出される「信阿」は、まず読者の眼をひきつけるのである。「黒法師」と異名をとった信阿。そういえば『平家物語』(巻一)にも、あまりの色の黒さに「黒帥」の異名をとり五節に舞った時「あなくるく黒き頭かな。いかなる人のうるしぬりけむ」とはやされた季仲卿の話があるが、黒い肌を連想させる「うるし」という言葉が、現代では特別の感慨をもって響いてくるようである。『平家物語』の中には歴史と積極的に関わっている人間像が描かれているが、「時の流れ」に翻弄されながらも、なお歴史に関わっていくとする「中世的」色彩の濃い人間形象が、飯野氏の信阿像には窺われるのである。覚林院の老沙弥に「外道の邪鬼」の如しと表された信阿。「鬼」は「悪」とともに力強い逞しさを伴って響いてくる。「自分のなすべきことが次々と外側からきめられて

くるというのは、腑甲斐ない」と思いながらも「この世から消えていく」という一生を信阿は認めようとせず「自分がどう生きることが自分を最も生かすことか」という命題にこだわり続けるのである。飯野氏は、このこだわりを「執着」という心の病根」と表現したが、それは決して負の意味での表現ではあるまい。

飯野氏の作品にリアリズムが存するとするならば、それは『平家物語』に内在するリアリズムを読みとり、自らの言葉で具象化したことにある。飯野氏は、信阿を描くことによって末世・末代・濁乱の世の「なまなましさ」を読みとっているのである。「読み」論が、ジャーナリスティックに響く現代における一面的で傲慢な読替えでないことは、綿密な調査に裏打された文章が物語るところである。十二章に余章を加えた十三章の構成は、覚一本『平家物語』の十二巻に灌頂巻を加えた構成法を思わせる。原『平家』を九巻本、その作者を信阿と断定することには無理がある。治承寿永の源平闘諍物語(「源平闘諍の物語」とすべきである)から平家物語へと変遷する生成過程に、もう少し物語らしい想像力をか

きたてる筆が及んでほしかった。会話文（直接法の）を排した文体は、それなりの思いを込めた試みであろうが、なまなましい人間関係を描き得ているかという点と半信半疑である。平家物語研究には、虚構論の視点があるが、筆者は、原『平家』作者のおもかげを考証的・実証的な光で写し出そうとしている飯野氏の作品を読み、緻密な表現も、時には読者の「想像」の場をそぎおとすことにはならないかということを考えさせられたのである。物語の存在力・生命を文体と結びつける方向で考える必要があるように思われる。

（一九八一年十一月 作品社刊 定価一三〇〇円）

飯野山治氏は本名も同じ、一九五一年卒。
谷口卓久氏は大学院修士課程二年在籍。

高木松雄著『異端の系譜』

服部 一希

「異端の系譜」と名付けられたこの作品は、表題が示しているように日本文学の系譜のなかから「異端」なるものを掘り起こすことに、その中心的課題が置かれている。

私が、ここで行ってみたいのは、作者が作品に織りこめたモチーフの脈動とでも言うべきものを浮き彫りにすることである。作者の深部に繭のように絡みついて離れないものは、明治以降の近代文学の方法に対する根強い異和である。そうした異和感は、作者の視線を不可避的に近代以前の日本文学の系譜へと向かわせている。作者が、近代以前の文学的系譜へと溯行してゆくのは、停滞する現代文学の土壌を揺り動かす可能性を、そこに見ているからである。作者の現代文学に対する異和感を決定的なものにしているのは、明治以降における日本文学の諸作品が、真の意味で大衆の精神を自己の方法意識のなかに包摂してこなかったという認識である。「芭蕉の場合は、△俗▽とまじわり、『俗語を正す』（くろさうし）ことをめざした旅だった」「西鶴は市井の隠者的立場に立って町人の可能性を文学に結実させようとした」こうした芭蕉や西鶴に対する関心の向け方は、作者の立場を何よりも鮮明に表しているように思われる。閉鎖的な体質をつくりあげ、大衆との間に断層をつねに築いてきたということ、そこに近代以降の文学的意識に対する作者の批

判は集約されると言ってもよい。

しかし、私が、最も不満に思うのは、読者と作者（作品）との関係を作者が直截的なものに見做しすぎていることである。「すくなくとも安部の初期作品には、読者を恐怖にまきこみ、『日常性』をゆり動かそうという萌芽があった。この点を僕は評価する。」作者が、このように作品を論じるとき、作品と読者との距離を縮めているように見えて、実は両者を遠ざけているだけなのだ。なぜなら、そうした観点にたつとき、作家の主體的な根拠も読者が個々に抱えこんでいる状況も全く捨象されてしまうほかないからである。作品と読者とは直接的には関係がないのであって、作品がどこまで読者（非読者も含めた）の抱えこんでいる状況を胎生させることができたかという度合からこそ両者は関係づけられるのである。ラディカルな根元的である作品とは、読者の平穏な日常性を揺り動かすような作品でもなければ、「△敵▽の存在をはっきりと浮かびあがらせ」ている作品でもない。私たちの状況を暗喩として圧縮している、ひとたびそこに踏みこめば、つねに私たちの状況を展望することのできる、弾力性に